

# 道徳教育についての考察

## A Study of the Moral Education

中野 靖彦

Yasuhiko NAKANO

### はじめに

いま、大人を含めて道徳的意識が低下していると指摘されている。とくに挨拶が出来ない、礼儀がない、善悪の判断ができない等々、若い人の道徳意識の低下が顕著であるという。また、電車の中での化粧、また携帯をしながらの運転、スマホ歩きが横行していて、大人も子どもも情報機器の虜になり、他人の存在に関係なく自分の世界に入り込んでいる。

こうなると、他人や仲間との会話は減り、コミュニケーション能力の欠如をきたす。子どもたちも年齢の異なる仲間との触れ合いが少なくなり、集団での自分の位置が分からない、自信が持てない、集団行動ができないなどの悩みを抱えるようになってきた。

いま、道徳の教科化を急ぐのは、こうした人としての最低限の道徳性が欠けているという認識が根強くあるのだろう。社会で他人とともに生きるための基本的な力や態度が育っていないといえる。そして、それは学校での道徳教育が不十分ではないかとの意見も強く、学校での道徳教育の充実が叫ばれ、道徳教育改善の指針が出され、教科化が進む。

これまでも学校では道徳教育が行われてきた。しかしながら、学校での活動と家庭や地域との間で話題が共有されてこなかったことが、道徳的意識を育むことのできていない原因はある。子どもたちは、学校で学んだルールを一生懸命に守ろうとする。学校の行き帰り、大人たちの行動を見ているうちに、少しずつ大人の行動を身につけているのである。また、家庭でも、学校で学んだ道徳のことが話題にならず、どうしても教科の成績や学習に関心が移ってしまう。結局は、学校で学習したことが家庭や地位での実践の場で生かされていないのも大きな原因の一つである。

そして、新学習指導要領において、道徳教育の在り方についての指針が示された。その指針とこれからの道徳教育について考察したい。

### 1. 道徳教育改善（平成20年3月 新学習指導要領）について

- ・道徳教育の基本的な考え方として次のようにまとめられている。

学校教育における道徳教育は、「道徳の時間」を要に学校の教育活動を通じて実施
---------------------------------------

・ 道德教育の目標として

道德教育の目標は、第1章総則の第1の2に示すところにより、学校の教育活動全体を通じて、道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道徳性を養うこと。

道德の時間においては、以上の道德教育の目標に基づき、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動における道德教育と密接な関連を図りながら、計画的、発展的な指導によってこれを補充、深化、統合し、道徳的評価の自覚及び自己の生き方についての考えを深め、道徳的実践力を育成する。

・ 道德教育の内容として、以下の4つの視点から具体的な内容項目を提示している。

- 自分自身
- 他の人とのかかわり
- 自然や崇高なものとのかかわり
- 集団や社会とのかかわり

まさに道德教育は、自分を知り、自分を高め、相手を知り、尊重することである。自分を知らないで他人を知ることは難しい。自分を知り、仲間とどう関わるか、広く社会の人とどう関わるかを学び、成長を図るものである。

2. 新学習指導要領が公示された（平成20年3月）。

そこには今の道德教育の現状がある。平成24年5～6月に、公立小中学校を対象として実施された道德教育実施状況調査によると（図1：文科省2013）、

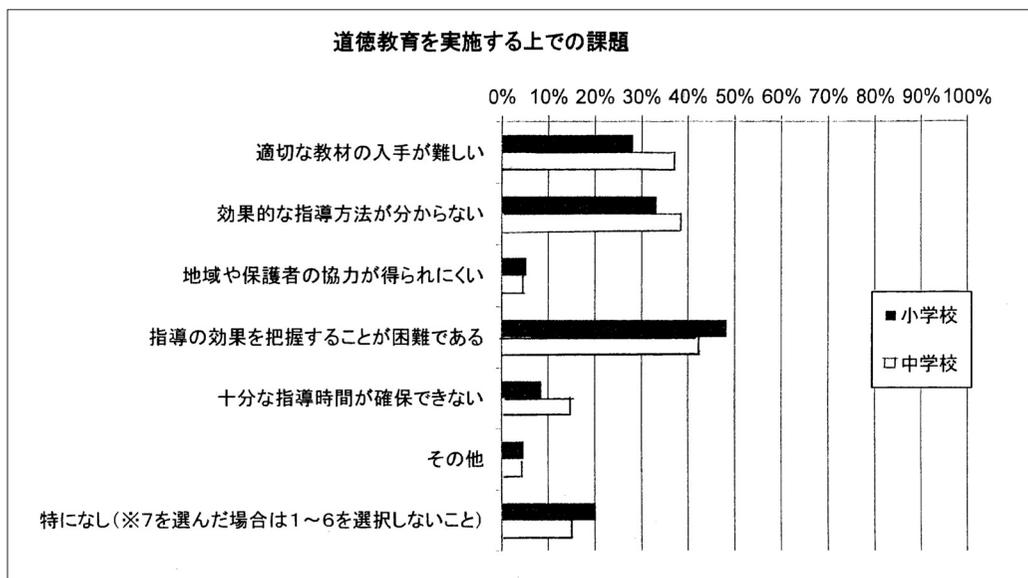


図1 (文部科学省 2013)

道徳教育を実施する上での課題として、小・中学校とも、指導の効果を把握することが困難、効果的な指導方法が分からない、適切な教材の入手が難しいなどである。

ここに挙げられてある項目は、実際に学校現場で指導していても、多くの先生から指摘されていることである。とくに何が道徳的で高い評価といえるのか、その指導をどうするか迷うところである。

### 1) 効果把握の難しさ：道徳的な態度、姿勢とは？

道徳教育の効果の把握をどうするかは、今まさに道徳の教科化の議論でも意見が分かるところである。教科化して、評価をするにあたっての基準作りが難しい。

ある小学校で、‘お互いに信頼し、助け合いながら友情を深めていこうとする心情を育てる’という教育目標を設定した2時間の授業があった。教材を読みながら、登場人物の2人の友だちの心情を考え、子どもたちが自分たちの意見を発表していった。そして最後のまとめで、‘あなたは、これから友達と接する中で、どんなことを心がけていきたいと思いますか’と教師は子どもたちに問いかけながら、意見を集約していった授業は終了した。

子どもたちは‘相手の気持ちを考え、思いやりの心をもつこと’、‘本音でお互いに言い合うこと’等々の意見が出され、板書された。教師の期待したような意見が出された。そのこと自体はいいことであるが、授業で子どもに何を学ばせるかが明確でない印象を受けた。

この教材をじっくり読むと、友だちが良かれと思ってやったことが結果として二人の友情関係にヒビを入れたことになるものであった。このような友情関係について述べた生徒もいたが、結論として、板書にまとめられた内容（相手の気持ちを考え、思いやりの心をもつこと等々）で終わった。

ところで、最後のまとめのような意見が出れば、道徳的に高い評価と言えるのだろうか。友だちのことを考えて本当のことを告げるがいいか、言わないほうがよいか、われわれ大人でも迷う。そのような迷いの中で、われわれは友情を維持しようと苦心する。自分たちの日常の経験に合わせてもう少し、突っ込んだ内容にしてもいいという感じがした。授業では教材の内容とは関係なく、道徳的に求められる結論は決まっている。子どももそれを察している。

発達年齢によっては、子ども同士が本音でぶつかり、ジレンマを起こして迷わせるのはよくないという理由も分かる。しかし、道徳に正解があるかといえば、‘ノー’である。人との関わり方にもいろいろあり、その時や場に応じて、それぞれの発達段階に合った形で、学ぶときにしっかり学ぶことは大切である。いじめ等の問題をみると、子ども時代に、迷いながらも友だちの事や相手のことを真剣に取り組み、考える機会はあるといい。揉まれることの少ない今の子どもたちは、いつ、どこでしっかりした道徳性を学ぶのだろうか。

教科化によって心配されるのは、画一的な基準で評価されることである。たしかに、基準があれば指導しやすい。しかし、それが道徳的な評価といえるかはなほ疑問ではある。

## 2) 効果的な指導、教材の活用

いま教科書も指導書もない道徳をどう指導してよいか悩む教師も多い。しかも、一週間に一時間程度の道徳の時間で、しっかりした道徳観を養うことができるか定かでない。道徳の授業と日頃の行動が結びつかないと難しい。

文科省の資料でも、道徳の時間をもとに特別活動等々で道徳的实践力をつけると書かれている。学校全体のあらゆる活動は道徳に直結しているが、それでは一時間一時間の道徳の時間では何をするか。たしかに、一時間の目標があり、その達成のための授業ではあるが、教師にはその時間内にまとめなければならないという意識があり、結論を急ぐ傾向もある。そのため、最後に子どもたちが自分なりに受けとめ、発展させていく機会を逸している恐れがある。

また、道徳教育の時間は学校でのさまざまな活動とリンクさせることが求められている。そのことは、道徳で使用する教材とも関連してくる。いま道徳の時間で使用する教材には「心のノート」をはじめ、さまざまなものが市販されている。また最近ではインターネットより得られる情報も多い。しかしながら、教材はあくまで教材であり、教師の指導の仕方次第で授業は充実する。

教える教師自身はその教材から何を感じ、学校での種々の諸活動や自分たちの生活等に照らし合わせてどう判断し、どう行動するかをしっかりと見据えた上で授業に臨まないと、教材の中だけの人物の心情を読み取ることに終始してしまう。新学習指導要領における改善のポイントで「児童生徒が感動を覚える教材の開発・活用を規定」が指摘されている。教師として、また一人の大人として、子どもたちの心に響くよう、教材の内容をどう伝えるかである。そのためには教師自身が感動し、心揺すぶられる経験をすること、それに見合った教材を選ぶか、自ら作成することも大切である。

ジレンマ教材も多く使用されているが、どのレベルのジレンマを起こすか難しいところである。小学生に、対立する意見を述べさせて授業を進めていることも多いが、それを心の奥深くに関わることは避けているようだ。あまり深入りすると、子どもの心に何が残るか不安でもあるからである。

また、それぞれの学年にどのような教材を使うか悩む。当然のことながら、5年生には5年生相当の教材を使う。しかしながら、学級の子どもの読書力や読解力は異なる。子どもたちは、内容を理解するだけで時間を取られてしまう子どもも多い。結局、登場人物の心情を読み取ることで精一杯になる。

繰り返すが、教材はあくまで教材である。したがって、子どもたちが内容をしっかり把握できることを考え、2学年くらい下げた教材を使うこともいいだろう。その内容をもとに、子どもたちが、自分の生活している中で、どのように受け取り、どう判断するかを一緒に考えていけるもののほうが望ましい気はする。

授業後の子どもたちの多くは、大抵、よく分かった、これからは友達を大切にしたい、等々の感想を書く。多分、今日をよく分からなかったとは書かない。それをみて、今日の授業で子どもの心に訴えることができたと思いたくもなるが、ちょっと考えてほしいこともある。

われわれは、日常でも友だちがミスをしたとき、注意してあげたほうがいいのか黙っていたほう

がいいか悩む。しかし、そこには教科書も指導書もない。自分のこれまでの経験や体験から判断し、行動せざるを得ないのである。

### 3. 新学習指導要領における改善のポイント

改善のポイントとして、年齢相応の自覚すべき点が挙げられている。

各学年を通じて自立心や自立性、自他の生命を尊重する心を育てることに配慮するとともに、児童生徒の発達段階に応じた指導内容の重点を明確化。

小学校 低学年：あいさつなどの基本的な生活習慣、社会のきまりを身につけ、善悪を判断し、人間としてしてはならないことをしないこと  
 中学年：集団や社会のきまりを守り、身近な人と協力し助け合う態度を身に付けること  
 高学年：法やきまりの意義を理解すること、相手の立場を理解し、支え合う態度を身に付けること、集団における役割と責任を果たすこと、国家・社会の一員としての自覚をもつこと  
 中学校：自他の生命を尊重し、規律ある生活ができ、自分の将来を考え、法やきまりの意義の理解を深め、主体的に社会の形成に参画し、国際社会に生きる日本人としての自覚を身に付けること

先に挙げた道徳教育の改善内容として挙げられている4つの視点（他の人や自然や崇高なものとかかわり、集団や社会とかかわり）が、それぞれの発達段階に応じて獲得すべき点が指摘されている。

いまの子どもたちは、少子化の影響を受けており、小さい頃から地域で異学年の仲間と遊ぶ機会も減り、家庭でも兄弟・姉妹が少なく、幅広い人間関係を構築することも少なく育ってきている。良好な人間関係を築くには、自他の存在を認め、お互いの考え方や能力などの違いを認めて受け入れることがもっとも大切である。

しかも地域の教育力が低下し、学校教育の中でしか、集団や仲間との関係づくりを養うことができなくなっている。その意味でも、学校では異学年との交流などによって、幅広い人間関係を作る必要がある。

また、自然体験や崇高なものとかかわりについて、学校では動物を飼ったり、植物を植えて育てたりする活動を行っているが、学校教育だけでは限界がある。家庭や地域の協力が大切である。休日には、家庭で出かけて自然に触れる機会も必要である。

休日に、学校、家庭、地域の人たちが中心となって子どもたちのためにさまざまな活動をしている地域も多い。ある時、子どもたちが金魚すくいの体験を実施した地域があった。金魚がすくえない子どもたちも、金魚をビニール袋に入れてもらい、楽しく行事も終わった。しかしながら、次の日、先生が学校に行ってみると、学校の池に金魚が一杯であったという話を聞いたことがあ

る。子どもたちが、昨日もらった金魚を学校の池に入れて帰ったようである。

なぜ、このようなことが起こったか先生にも分からなかった。しかし、子どもたちは、家に金魚を持ち帰ったときに、その金魚をどう育てるの？エサはどうするの？等々、親から詰問されるのではという不安を感じ、学校の池に放して帰ったという。地域の人々との活動が家庭で話題になりにくいことを子どもたちが察して、そんな行為に及んだとしたら悲しいことである。

その金魚は綺麗ね、何か入れるものはないかな、何をエサにしたらいいのかなど、家族での会話が弾む折角の機会を、子どもたち自身が放棄してしまったのである。

このような様子を見ると、日頃、家庭での話題がどのようなものか推測される。学校であったこと、地域であったことが家庭で話題にならないとも想像できる。保護者は学校での成績が気になることは分かる。ただ、子どもにとって、家にまで成績の話題では気が詰まる。

次の規定は新学習指導要領の改善の一つポイントでもある。

道徳の時間の授業公開、家庭や地域社会との共通理解・相互連携を規定

以前から、学校・家庭・地域の連携の必要性が叫ばれている。それぞれが連携し、子どもたちの社会性、とくに人との関わり、道徳性を養うことにある。そのためには学校、家庭、地域が話題を共有し、子どもを育てるのである。子どもが、家庭のみならず、学校の行き帰りでもいろいろ話してみたい、日頃から会話ができる環境づくりが大切である。

#### 4. これからの道徳教育のあり方を考える。

##### 1) 教師の指導力の向上

道徳をはじめ、教科でない教育活動には教科書がないために、教師の経験と指導力が大きく関わってくる。道徳を教科化することによって教科書を作成し、指導書ができれば道徳の授業はスムーズにいくのだろう。そうすれば、どの教師も同じように進めることが可能であり、授業はやりやすくなるのも事実である。

しかし、そこで学ぶ内容がかなり画一化されたものとなる恐れはある。たぶん総ての子どもに求められる道徳的な基準は、社会活動を維持していくため、国民として身に着けるべきものであろう。そのレベルの達成なら十分に理解できるし、何も教科にする必要もないだろう。われわれは、実際に社会に出て、多くの人と関わりながら生きていかなければならない。その術は人によって異なり、その人らしさの道徳性を磨かなければ意味がないと思われる。

学力低下などによって、ゆとり教育の見直しが行われている。たしかに総合的な学習の時間には指導書はない。さらに総合的な学習の指導も受けたことのない教師が、教科書のない授業を手探りでやってきた。ゆとり教育にはまさに教師の指導力が問われたのである。

いま教師の資質向上が急務であると指摘されているが、特に道徳の指導で教師としての大切な能力は何ですかと問われても具体的に挙げることは難しい。

授業は生きものであるとよく言われている。子どもたちの様子も、毎日毎日違う。同じ場面、

同じ状況は少ない。生きている授業には、教師の意図通りに進まないことも多い。場の状況に応じて柔軟に対応できる力と教師自身の日頃からの興味・関心の広さと多くの経験に裏打ちされた知識が教師の資質であると思う。このことは他の教科でも言えることではあるが。

‘教科書を教えることから、教科書で教えること’に軸を変えないと、いくら道徳が教科になってもこれまでと大きく変わらない。

また、教師の指導力は学校全体の指導体制に支えられることも多い。道徳の授業をもとに、特別活動など多くの学校行事を通して、道徳的な実践を身に付けることが求められている。そのような学校全体との活動のコーディネーターの役割を担い、学校全体の道徳教育を高めようとの意図で、「道徳教育推進教師」を中心とした指導体制の充実がある。

## 2) 「道徳教育推進教師」のあり方

小・中学校学習指導要領解説（道徳編）に道徳教育推進教師の役割として、

道徳教育計画の作成、推進、充実に関すること、指導体制、教材の整備・充実活用、情報提供や交換、家庭や地域との連携、評価に関することが明記されている。そして、ほぼ100%の学校で配置されている。

まさに、推進教師は学校での道徳教育の要であり、役割は重い。しかしながら、もっとも肝要なことは、教師が相互に情報を交換し、常に教師相互の授業を顧みながら改善を重ねていくことである。推進教師は、そのような学校全体の環境条件を整えることにある。道徳教育推進教師に負担がかかり過ぎては学校全体の運営に影響する。

## 3) 道徳教育の効果はすぐに表れないものでもある

道徳教育は、道徳的実践力を養成することにあると言われているが、この道徳的実践力とはどのような力であろうか。ある調査（愛知県）に次のような結果がある。

質問	小5	中2	高2
学校のきまり（規則）を守ることは大切である	84.3%	65.3%	47.9%
学校のきまり（規則）を守っている	38.5%	43.3%	42.1%

小学生から高校生まで、‘守ることは大切であるか’、‘守っているか’、についての回答を見ると、小学生では8割以上の子どもが、決まりを守ることは大切であると回答しているのに、守っている子どもは4割弱である。年齢が上がるにつれて、守ることが大切と考えている者も5割を切っている。この結果をどう見ればいいのか。

小学生の子どもたちは、学校で規則は守るべきということを教えられ、一応、社会が期待するような道徳観のようなものは育てている。しかしながら、実際に守っていない子どもが多い。‘規則を守っていますか’と質問したとき、小学生くらいの子供たちは一度でも規則を破れば、守っ

ていないと素直に回答しているとも受け取れるので、この結果をそのまま鵜呑みにすることはできないのも事実である。

ただ、反抗期ころの高校生が規則を破りたがるのもささやかな反抗であると思うが、守らなくてもよいというのが半分以上いるということは、道徳観なり、道徳的実践力が身についているといえるかはなはだ疑問ではある。

今の子どもには行動力とか実践力がかけているのも事実である。学校で習うことは知識として残るが、実際に学校外で仲間とか社会で規則を守ることの体験などの機会が少ない。したがって、やってはいけないことはわかっているが、その場になったとき、どのように行動してよいか分からない子どもが増えている。道徳的な行動ができない。

一方で、道徳教育の効果はすぐには表れないと考えられる。授業で子どもたちの書く感想は、その授業を通して実際にそう感じたと思う。そのような積み上げが大事であって、将来、実践に結びついた道徳的な心情に育っていくとも考えられる。

それは、今の日本の社会が道徳的に乱れていて、收拾が困難なことは少ない。東北の震災が起きたとき、東京で通勤の足が確保できなかったのに、あれほど整然と動く日本人を海外では驚きで受け取られたようだ。これも、すぐには表には出ないが、このような日本人の行動は日頃の道徳教育のおかげであると述べた人もいる。

規則は守るべきではあるが、状況に合わせて柔軟に動ける能力、たくましさも求められているのである。

#### 4) 道徳意識の育成は子どもの頃が大切

電車の中で化粧する若者を見て、大人たちはみっともない等々の苦言を呈する。時代の変化とともに世代間ギャップも大きくなり、道徳観も変わる。しかも、十年一昔が、一年一昔と言われかねない。必然的に、若者の行動が気になるのも頷ける。だが、人が社会で生きていくための道徳観はそう変わらないはずである。そして、子どもの頃に身についたものはそうそう失われることはない。

かつて、漫画やテレビで日本の昔話をよく見た。また最近でもテレビで放送もされている。日本の昔話などの話の筋はシンプルであり、まさに道徳的な内容であり、悪い行いをすれば罰せられ、よい行いは褒められるものである。幼い子どもがこのような内容を見れば、たぶん素直にインプットされ、悪いことをしてはいけないと感覚的に知る。道徳観の根底はそこにあり、大人になってもそうそう消えるものでもない。

学校では、他人とのかかわり、自然とのかかわり等々、さまざまな観点にたった道徳観を学ぶが、そこには他人を考える、自分のことだけを考えてはいけない、欲張ってはいけない等々の教えがある。昔話によく出てくる内容でもある。こんな内容を、子どものころから家で読み聞かせをしてもらっているうちに、何が悪いか良いかを漠然としながらも頭に残る。そして、幼稚園でも話題になれば、小学校から高校、大学へとバトンがリレーされていくと思う。

このように、漠然ではあるが、幼い頃に善悪の基本的なことを身に付けたいうで、学校での道

徳の授業に臨んだとすればどうであろう。教材から登場人物の心情を読み解くうえで、子どもの心はかなり自然に、またスムーズに入り込んでいけよう。さらに学校で習ったことが夕食時に家庭で話題になれば、学校と家庭でキャッチボールができる。

道徳観の形成には就学前の家庭教育の段階での役割が大きい。

### 5) 心と体の健康を目指して

近年、幼稚園児で10時以降に寝る子どもが5割弱もいるようである(2005 子ども白書)。また、夜遅い時間なのに、ファミリーレストランで食事をしている家族を見かけることもある。

いま園児だけでなく、子どもたちの就寝時間が遅くなっている。その原因として、大人の生活時間に合わせて遅く寝る子どもが多くなったようだ。一時期、家庭での親子の会話が減っていることに危惧を抱く人々からの指摘を受けて、親子でのふれ合いの大切さ、できるかぎり親子で一緒に時間を過ごすことが勧められた。そのため、お父さんが仕事で帰るまで子どもは待っていて、帰ってから親子で食事したり話したりする時間を取る。どうしても寝る時間は遅くなる。こんなことの繰り返しが続くと、寝不足で学校や幼稚園で授業中、あくびも出てしまう。

夜遅くまで起きていて、朝、ぎりぎりまで寝ていて、急いで幼稚園や学校に行くようではしっかりした生活リズムはできない。しっかりした生活のリズムは精神的なリズムの元となる。身体のリズムの変調が心のリズムの変調につながる。

道徳教育の内容に、「自分自身」とある。他人との関わりには自分自身が大切である、自分が好き、自分のことが分かる等々、自分自身についてのしっかりした認識が大切である。

一時、家族がバラバラで食事を取る‘孤食’の問題が指摘されたが、この他にも食卓を囲んでも一人が違う料理を食べる‘個食’もある。家族が同じテーブルを囲んでいるので、一見、家族団らんの様子であるが、食事の内容が異なることは共通の会話が成り立ちにくい。同じ食事内容なら、お互いの好き嫌いも話すこともできるし、内容を共有できるが話題に乏しくなる。さらに、‘戸食’(外食で済ませる)、『固食’(好き嫌いが激しく同じものを食べる)、『濃食’(濃い味を好む)等々があるようだ。

いずれにしても、食卓での家族の団らんが減ることは、行儀や人との付き合い方等についての話題の共有が少なくなるし、親が子どもの健康状況や学校での様子を知る機会を逸していくことにもなる。

人が人としてどう生きるかの基本的な道徳観の形成は、就学前の生活習慣の影響が大きいと考えられる。

## 5 最後に

最近の文部科学省の有識者会議で、「道徳の授業」を教科(国語などの教科とは違う)に格上げして検定教科書を使うべきとする提言がなされ、11月ごろにまとめられるとの情報もある。これから中教審で議論されるが、慎重意見もあるようだ。

道徳の教科化については、教員の資格や教科書、また評価等を考えても、たぶん国語とか算数

と同じような教科にすることは難しいだろうと想像される。道德教育の授業が確実に行われること、子どもたちに確かな道德観、実践力を付けることに教科化の狙いがあるとすれば、そのような方針を学校全体としてどう受け止め、実践していくかである。

教育はさまざまな活動の総合体でもある。心身ともに健康であることが、道德観の本質であるような気がする。こんなまとめをしていると、何故か、アインシュタインが書き残したといわれるものを思い出した。

‘教育とは学校で習ったすべてを忘れた後に残るもの。’

学校で習った歴史の年号や理科の記号など単に暗記したものは大抵、忘れていく。しかし、いつ何をやるのか、自分と仲間や先生と触れたこと、体験したことは頭に残っている。生きていくために必要なことは、早々、忘れるものでもない。

ある人曰く、‘日本ほど安全で道德的な国はない’。確かに、世界からそのような指摘もされている面もある。これは、学校で道德教育で繰り返し指導されてきたことが心のどこかに残っている所以でもある。それを教科化によって、さらなる道德意識をどのように高められるのだろうか。

H25年10月3日のある新聞で、あるNPOの調査が載っていた。「やられたらやり返しても良い」と教えられた子どものほうが、いじめ等の被害者になったり加害者に加わったりすることが多いようだ。やられたらやり返すくらいの強さを持って欲しい、子どもにたくましく育てて欲しいという気持ちの表れであるが、「倍返し」ということばが巷に流れる昨今、もし、子どもがいつか倍返ししようと思うようなことがあればどうなるか危惧される場所である。

注) □枠内の文章は、文部科学省『道德教育について』から抜粋したものである。

## 参考・引用文献

- ・愛知県教育委員会 『あいちの教育に関するアクションプランII報告書』2013
- ・愛知県弥富市立弥生小学校 道德教育校内研修会資料 2013
- ・朝日新聞 2013.10.3
- ・子ども白書 『眠れない・眠らない日本の子どもたち』2005
- ・文部科学省初等中等局 資料『道德教育について』 2013